

文芸OGネットワーク通信



Vol.12

〒101-8437 東京都千代田区一ツ橋 2-2-1
文芸OGネットワーク 代表 稲見 和子
発行：2010.3.6

共立女子大学文芸メディア研究室内
Tel/Fax 03-3237-2681
URL www.kyoritsu-wu.ac.jp/bungei

共立祭 '09 開催

2009年の共立祭は、10月17日(土)～18日(日)の2日間にわたって神田一ツ橋キャンパスで開催された。テーマは「千紫万紅」、テーマカラーは「秋桜色」。文芸OGネットワークも、創作展示とバザーで参加した。

今回の共立祭の開催時期は、折悪しく新型インフルエンザの感染が広がりを見せ始めたところで、共立女子学園でもこの時期、中・高校で一部学級閉鎖が行われたという。例年であれば、卒業生も含めて、学園を挙げて盛大に行事が行われるところだが、感染の予防対策のため、中・高校の共立講堂におけるイベントが中止になり、一般来場者も制限された。当初予定されていたプログラムも変更され、本館と体育館の間のグラウンドで、共立祭を盛り上げてくれていた恒例の学生たちの出店も中止となった。

ただ、大学関係は、予定通り行われたので、本館1階のロビー・

ステージではダンス、ファッション研究会、箏曲、合唱、バンドなど、多くのサークルの発表が切れ目なく繰り広げられ、色とりどりの花が咲き誇る情景をイメージしたというテーマ「千紫万紅」にふさわしい華やかさと賑わいを呈していた。

展示・発表会場は本館地下1階～5階と3号館の一部などの各教室に振り分けられ、作品の展示や研究発表、楽器演奏、劇上演、バザー、ショーなど、バラエティーに富んだ催しが開かれた。5号館(体育館)では例年どおり桜友会の全国支部の活動報告やバザーが行われた。同時に本館15階では大学と短期大学のオープンキャンパスも開かれた。

文芸OGネットの会場は本館4階のエレベーターホールに近い407号室。会場入り口には、川瀬治子さん(S52卒)制作の共立祭参加ポスターが、扉には、劇芸術



会場風景

資料整理の様子を紹介する写真が貼られている。会場に入ると、今野美保子さん(S35卒)のパステル画がホワイトボードと壁に、湊一子さん(S33卒)の人形の創作展示が、壁に沿ってしつらえられたカウンターに飾られ、小池恵己子さん(S56卒)作の生け花が会場に華やかさを添えていた。一隅にはテーブルと椅子も準備され、ちょっとした茶菓が用意され、来場者との歓談の場となっていた。

今年もバザーは盛況で、会員の皆さんの協力もあり、アクセサリ、バッグ、食器類などの日用品、スカーフやセーターといった衣料品などの品々が提供され、用意したテーブルに収まりきれないという、うれしい事態であった。変わったところでは、松尾慶子さ

ん(S35 卒)手作りの万華鏡も幾つか並べられ、好評だった。バザーの売り上げも好調でもろもろの経費を差し引いても、純益が得られた。これは今後のOGネットの活動の一部に活用される予定である。

創作展示の紹介

パステル画の展示をされた今野美保子さんは、子供のころから絵を描くのが好きだったという。学生時代から、課外活動などで、油絵を描いていたが、パステル画をはじめたのは5年前。ソフトパステルを使って、自宅で制作にいそしんでいる。400種類もあるソフトパステルの



今野美保子さんの作品
「くつろぎの時」



湊 一子さんの作品
古代遺跡エフィソスの写真をバックに

美しい色を眺めるのも楽しいという。今回展示の作品は人と花、大小合わせて9点。

人形の展示にご協力いただいた湊一子さんは結婚されて後、ご主人の赴任先で同好の方たちと人形作りを始められたというから、人形の制作歴は長い。

展示された人形は、2006年にトルコを旅行したときに訪れた古代都市エフィソスの遺跡に心を奪われて、膨らんだイメージを帰国してから一気に人の形に作り上げたものという。展示では、ご自分で撮った遺跡の写真を背景にして人形が並べられている。人形が古代の都市に住んで通りを歩いているかのようだ。

体験記 今を生きる



病を得て思うこと
藤川 道子

「ここでは治療出来ないのです、がんセンターをご紹介します」
「(遠いなあ) 日赤はどうでしょうか」
「日赤にも良い先生がいらっしゃいます」

九ヶ月に及ぶ入院生活の始まりだった。病名は悪性リンパ腫。風邪ですと言われたかの如く、淡々と聞いていた。治療開始後、合併症で胃に静脈瘤がある事もわかった。

抗ガン剤の副作用は殆どなく、

頭髮が抜けるのも仕方のないことと特別な感慨もなかった。頭が痒くなり何も被らずに動き回ったこともあった。

胃の静脈瘤から四度の出血があり、応急処置に、麻酔無しで胃カメラ治療をした時の方が辛かった。外科手術も二度。

先生からは、我慢しないで何でも言ってくださいと言われたが、病気に縁のなかった私には、こんなことまで言ってもいいのかしらと思ひ、又我慢しているつもりもなかった。

闘病という思いもなく、長い休暇をもらったような、日常の延長のような気がしていた。環境に順応し易い性格のようで、病院での生活にも徐々に馴染んで行ったようだ。

今年の四月で、造血幹細胞移植から二年を経過し、再発の恐れも

少なくなり、徐々に体力を回復し元気になっている。

今、入院中の自分を振り返ると、心身共に芯が強いこと、前向きで思った以上に楽天的なこと(忘れっぽいのかもかもしれない)、そして以前よりおしゃべりになったこと。

翻って今の私は、健康になるにつれて元の怠惰でやる気のない生活に戻りつつあるようで、反省の毎日だ。

後何年生きられるかわからないけれど、好きな物が食べられ、やりたい事が出来ることに感謝し、入院中、退院後の前向きな気持ち忘れず、自然体で悔いのない日々が過ごせたらと願っている。そして、もっと元気になったらこの経験を生かして、人々のお役に立てたらと思っている。

(S46 卒)

サークル探訪

ミュージカル研究会

共立祭で「ミュージカル研究会」を訪ねた。「マジシャンの憂鬱」と題したミュージカル。触りだけしか観られなかったが、引き込まれていく。その語り口は宝塚を思わせる。「男装の麗人」という言葉がぴったりのマジシャン役が部長の青木優里さんである。研究会について聞いてみた。

「宝塚が好き」「ミュージカルが好き」「初めてだけれどやってみたい」と部員達の入部の動機は各自様々。しかし、作品を作り上げようとする気持ちは一つである。衣装も手作り。経験のある者がいない者を助けながら演技をつけていく。そんなフレンドリーな部が大好きと青木さんは言う。

観ている人に感動を与える為にも日頃の練習は欠かせない。さらに作品選びは慎重になる。作品への思い入れ、集中力を高めると

いうことを考えると、自分達の本当にやりたい作品が取捨選択されてくる。さらに、キャストینگはオーディション形式でかなりの練習が必要とされる。また、最高の演技を観てもらおう為には、自分達も出来る限り、良い作品、本物のミュージカルを観ることが一番。演じている人の、体の動き、手の動き、目の配り方、照明の当て方等々、学ぶことが多いという。今の1年生が11期生という比較的新しい部ではあるが、作品作りへの意気込みはすばらしい。演劇に対する熱い思いを感じた。

残念なことに、卒業後、演劇の道に進む人は少ないということだが、学生時代にこのように熱くなれる物があるということは、素晴らしいことである。

毎年2回、7月と11月に公演



「マジシャンの憂鬱」プレ公演にて

があり、7月はダンスと歌、11月はストーリー性のあるものを行うということである。11月21日に共立講堂で行われた公演は3年生にとっては最後ということもあり、力が入ったものとなった。それは、3年生に限らず部員一人ひとりの集大成。きっと満足のものだったことであろう。

毎週月、水、金曜日、1号館の535号室から素敵な声が聞こえてきたら、それが「ミュージカル研究会」である。ちょっと立ち止まって聴いてみたらいかがでしょうか…?

大友 佳代子 (S49 卒)

広場 - ひろば -

仙葉弘子さん、陶研展に出展



以前に共立祭の「創作と展示」でご協力いただいた仙葉弘子さ

ん(S33 卒)の所属する陶研究会が、去る2009年10月22日～25日、池袋のオレンジ・ギャラリーで、陶研展を開いた。題して、「大地を焼く」。

会場の入り口では個性的な大きな花の壁面陶作品と陶の造型が迎えてくれる。会場は思い思いの個性豊かな作品でいっぱいだ。壁をぐるりと取り巻くのは写真とデータを駆使した土の研究、窯の研究、草木灰釉の研究。研究熱

心な会員の集まりであることがわかる。

今回の仙葉さんの作品は陶器の壺と花生。土は美濃採土と赤津土を混ぜたもの。最高1250度、平均1000度にもなる薪窯で70時間焼いた。釉薬はかけていないというが、薪の灰が景色となって、シンプルながらも落ち着いた、どっしりとした風格を見せていた。決まり事にとらわれない、自由な作品作りをしている会の雰囲気が見え、仙葉さんの新しい境地がうかがえる作品展だった。

劇芸術資料室から

日比谷にある「シアタークリエ」と聞いて「ああ、元の芸術座ね」と答えられる人はかなりの芝居好きといつてよいだろう。森光子の「放浪記」初演をふくめ東宝現代劇の常打ち劇場であった「芸術座」は平成19年、片仮名の名前が示すように近代的設備を備えた洒落た劇場空間に変身した。若い支配人をはじめとしてスタッフ全員が女性というのも珍しい。

「シアタークリエ」とは異なり、同じ建物でありながら劇場名だけ変えたところがある。京橋にある「ルテアトル銀座」は平成11年までは「銀座セゾン劇場」と呼ばれていた。

品川にある「天王洲アイル劇場」は平成18年からはホリプロ経営となり、その名も「天王洲銀河劇場」と改めている。新大久保にある「東京グローヴ座」は、名前は変わらぬものの今ではジャ

ニーズ事務所の経営である。昭和63年のオープニングに華々しくロンドンから劇団を呼び、その後もシェイクスピア作品を精力的に上演したかつての面影はもはやない。資料整理をしていると、劇場名の変遷や演目の変化から、経済の動向まで透けてみえてくることに気がつく。

演劇人も自身の成長や演劇観の変化に合わせ、活動母体を変えている。劇作家横内謙介は自分の劇団「善人会議」を解散し、平成5年に「扉座」を立ちあげた。「夢の遊民社」を16年間率いてきた野田秀樹は、ロンドン留学後の平成5年、新しく「NODA MAP」（野田地図）という制作集団を作り活動の幅をひろげている。



「芸術座からシアタークリエへ」
「放浪記」（平成20年公演）パンフレットより

成長の節目に合わせて名前を改めていくのは、歌舞伎や能の世界にかぎらず、日本古来の伝統である。われらの「資料整理室」も早く「劇芸術資料展示室」と改名したいものである。

◆ 新メンバーからひとこと

初めての会報作り、そしていきなりのインタビュー記事の担当。不安は頂点に達していました。相手の思っている事を聞き出し、それを100%伝えることに難しさを感じま

した。書く際には、言葉の使い方に細心の注意を払いました。そして何より、無事に書き終えることができたのは、会報作りのメンバーの皆さんからのアドバイスがあったからだと思っています。

大友 佳代子（S49卒）

編集後記

◆ 共立祭後の役員会で、共立祭についての反省と検討が行われた。参加する趣旨は、卒業生の活躍を紹介する場（創作と展示）、相互交流の場（喫茶コーナー）、バザーの3つであるが、会員の高齢化が進み、展示の準備やバザーの開催に負担を感じるようになった。今のような形で参加を継続していけるのか、見直しが必要ではないかというのが大多数の意見であった。忌憚のないご意見をお寄せください。（小）

掲 示 板

◎総会開催のお知らせ

2010年度の「文芸OGネットワーク総会」を来る5月22日（土）、共立女子大学神田校舎本館にて開催します。総会は午前中とし、昼食をはさんで午後から、同会場にて、「文芸サロン講座」を同時に開催する予定です。



◎文芸サロン講座

講師：共立女子大学文学部
教授 鈴木国男先生
演題：「宝塚歌劇100周年にむけて」（仮題）

◎詳しいお知らせは追ってご案内いたしますが、ふるってご参加いただけますよう、お待ちしております。